

居場所から はじめる 地域づくり

枚方市高齢者居場所づくり事業
インタビュー調査 報告書

はじめに

枚方市では、「地域包括ケアシステム」(高齢者がいつまでも住み慣れた地域で自分らしく暮らしつつげられるように、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される体制)の実現を目指し、地域包括支援センターを中核とした取り組みが推進されてきました。具体的には、多くの地域において、「高齢者の体力づくり・健康づくり」「高齢者が参加・活躍できるつどいの場」「くらしのサポート」を通じた「生きがい・居場所・役割があるまち」を目指す「元気づくり・地域づくりプロジェクト」や、高齢者居場所(以下、居場所)づくりに取り組まれてきました。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、さまざまな地域活動が停滞を余儀なくされ、多くの居場所が活動休止状態に追い込まれていました。「高齢者居場所づくり事業は、高齢者が住み慣れた地域の中で、健康でいきいきとした暮らしができるように、自由に集まり、交流することができる場所」(枚方市ホームページ「高齢者居場所づくり事業」より抜粋)であり、枚方市で暮らす多くの高齢者の生きがいや満足感、そして社会における役割を創出してきました。居場所の活動休止は、参加者の健康状態を悪化させるばかりか、社会的なつながりを失うことによる喪失感を引き起こすおそれがあります。一方で、枚方市において、居場所を開催できない状況においても、参加者の社会的孤立を防ぐために、地域における声かけ、見守り、アンケート調査など、地域づくりの活動に取り組まれてきた方々がおられます。

本報告書は、枚方市健康福祉部健康寿命推進室の協力を得て、地域づくりを意識しながら居場所づくりに取り組まれるみなさまに対するインタビュー調査を行い、その内容を整理するとともに、これからの枚方市における効果的な居場所づくりのあり方を検討するものです。もちろん、居場所のあり方、そして地域との関わり方は多種多様であり、正解があるわけではありません。それでも、今回のインタビューを通じて得られた「活動に取り組むうえでの工夫」「課題」「他機関との協働」「目指すべき地域の姿」についての知見は、居場所を拠点とした地域のさまざまな主体の協働による支え合い活動に取り組むみなさまにとって、ご自身の活動を見直し、そして一步前進させるヒントとなるはずです。

なお、本報告書の内容について、「自分の地域でも同じことをしなければならない！」と感じていただく必要はありません。インタビュー調査の結果および分析・考察をご覧いただき、あらためて地域について考えてみることで、地域で暮らす人びとの生活や困りごとについて想像してみること、そして、ご自身にできることを具体的に描くこと、本報告書が、その一助となれば幸いです。

研究代表者
摂南大学学長 付
講師 上野山裕士

目次

はじめに	3
1. みんなの居場所を地域につくる	6
1) 地域共生社会の考え方と地域の居場所づくり	6
2) 枚方市の高齢者居場所づくり事業	14
2. 居場所づくりと地域づくりに関するインタビューの調査結果	16
1) 調査の方法	16
2) 調査地域および対象団体の概要	16
3) 調査結果	17
枚方第二校区「枚二みつば」	18
香里校区「ほっとカフェ」	20
明倫校区「宮之阪中央商店街振興組合」	22
津田校区「ほっこりクラブ津田」	24
川越校区「釈尊寺ふれあいの家、ふれあいのつどい処」	26
菅原東校区「ぶらっとホーム」	28
東香里校区「東香里元気づくり 地域づくりVタイム」	30
西長尾校区「西長尾元気づくり 地域づくり」	32
【参考】枚方市内における居場所のようす	34
3. これからの居場所づくりに向けて	36
1) テーマを明確にする	36
2) こだわりをもつ	36
3) 垣根をこえる	36
4) 「得意」を把握する	37
5) 選択肢を提示する	38
6) 地域内外につながりをつくる	38
7) 子どもを大切にする	39
8) 真剣に楽しく取り組む	39
おわりに	41

1. みんなの居場所を地域につくる

まず、本報告書のテーマである「居場所づくり」「地域づくり」について、基本的な考え方を、私たちが暮らす地域、そして社会の状況を踏まえて整理するとともに、枚方市において取り組まれている高齢者居場所事業について、実施に至る経緯とその概要を紹介します。

1) 地域共生社会の考え方と地域の居場所づくり

地域の暮らしと多様性

近年、地域が抱える課題が多様化、複雑化している、といわれています。ここ数年は、新型コロナウイルスの感染拡大と、それに伴う地域活動の停滞が、地域を取り巻く状況のもっとも大きな変化であり、地域が抱える課題となっていますが、そのほかにも、8050問題¹、ダブルケア²、ヤングケアラー³などの「世帯の複合課題」、ごみ屋敷、電球交換や庭の草抜きなどの「制度のはざまにある課題⁴」、相談相手や居場所の不在に起因する「社会的孤立」などが、多様化、複雑化した地域課題として挙げられます。地域が抱える課題の多様化、複雑化は、社会構造の変化とそれに伴う個々人の「価値観の多様性」「境遇の多様性」の顕在化によってもたらされたと考えられます。

私たちが暮らす日本は、第二次世界大戦終戦後、高度経済成長期を経て、バブル経済が崩壊した1990年代前半ごろまでつづいた「成長社会」から「成熟社会」へと移行したとされています。「成長社会」とは、人口増加や経済成長を基盤として、国が大きくなる(=成長する)状態です。ここでは、「経済的な豊かさ」が重視され、国にとっても、国民一人ひとりにとっても、「経済的に豊かになること」が共通目標となっていました(もちろん、全員が全員、経済的な豊かさを追い求めていたわけではありません)。一方で、「成熟社会」とは、ひと言でいえば、一人ひとりの「豊かさ」の指標が多様化する状態です。たとえば、いままでのように経済的な豊かさを求めて「バリバリ働く」人もいれば、精神的な豊かさを重視して「趣味に生きる」人や「家族が一番」という人も増えてきて、それぞれの価値観、つまり「自分にとってもっともたいせつなもの」を尊重していこうという社会に変わりつつあります。これが、「価値観の多様性」です。

さらに、日本では、「境遇の多様性」、つまり、一人ひとりが生きる環境の多様性も顕著になっています。日本は、国の経済規模を示すGDP(国内総生産)はアメリカ、中国に次いで世界第三位で、経済大国であるといえますが、経済格差、いわゆる貧富の差は拡大傾向にあり、とくに子ども、ひとり親家庭の貧困については先進諸国のなかでも深刻な状況です。ここで紹介した経済格差のほかにも、日本には、障がいや疾病の有無、学歴、性など、さまざまな境遇のなかで生きる人たちがいます。もし、それらの「境遇」が理由でなんらかの生きづらさを感じている人が

¹ 引きこもりの長期化により、引きこもり当事者が50代、当事者の生活を支援する親世代が高齢(80代)になり、生活の困窮やその他の不安が深刻化する状態。

² 晩婚化や晩産化などを背景として、育児と親の介護を同時に担う状態にある個人(世帯)。

³ 障がい、疾病、乳幼児など、ケアを必要とする人が家庭内にいる状況で、本来は大人が担うことが想定されている家事や家族の世話、介護、その他のサポートを行っている18歳未満の子どものこと。

⁴ 介護保険、障害福祉サービス、子ども・子育て支援などといった法律や制度には規定には規定されていないために、行政および法律、制度に基づいて業務を行う専門職だけでは対応しきれない地域課題のこと。

いるとすれば、私たちは社会全体で、その生きづらさの解消に向けて取り組まなければなりません。

ここまで、「価値観の多様性」と「境遇の多様性」について簡単に説明しましたが、ご理解いただきたい点をひと言で表現いえば、「地域にはいろんな人がいる」ということです。つまり、「私」と目の前にいる「あなた」は、価値観(たいせつにしているもの)も境遇(暮らし)も異なるかもしれない、いや、異なっていて当然、という社会のなかで私たちは生きています。だからこそ、価値観や境遇を含め、自分の考えや自分のなかの「正しさ」や「あたりまえ」を他者に押しつけるのではなく、まずは他者の声に耳を傾け、他者の暮らしに寄り添う姿勢がたいせつです。これは、居場所づくり、地域づくりに取り組むうえでの基本的な考え方となります。

地域共生社会の考え方

さて、地域が抱える課題が多様化、複雑化するなかで、現在、目指すべき社会のあり方として、「地域共生社会」の概念が提唱されています。地域共生社会は、「制度・分野ごとの『縦割り』や『支え手』『受け手』という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域とともに創っていく社会」のことをいいます。なお、地域共生社会の考え方がはじめて示された「ニッポン一億総活躍プラン」では、「支え手側と受け手側に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、福祉などの地域の公的サービスと協働して助け合いながら暮らすことのできる仕組みを構築する」ことの必要性が示されており、支え手(支える側)と受け手(支えられる側)という垣根をこえることを前提として、「役割」「支え合い」「活躍」「世代間交流」「分野横断」などがキーワードとなっていることがわかります。つまり、地域共生社会を実現するためには、法律や制度で規定されているような公的サービスだけ(制度的な取り組み)の充実はもちろんのこと、地域における支え合いやボランティア(自発的)な活動など、非制度的な取り組みを拡充させていくことが不可欠となるわけです。

さまざまな価値観、境遇の人びとが生きる現代において、だれもが自分らしく「共に生きる」社会をつくるために、一人ひとりがかけがえのない存在として役割と居場所をもち、活躍しながら支え合いの輪を広げていくような地域づくりに取り組むことが、いま、求められています。

地域共生社会と地域包括ケアシステム

さて、前項で「地域共生社会」という概念を紹介しましたが、「高齢者居場所づくり事業」が目指す「地域包括ケア」とはどのような関わりがあるのでしょうか。すこし整理をしてきたいと思います。

下図は、日本福祉大学の原田正樹教授が整理した概念図ですが、ここでは、「地域共生社会」は上位概念、「地域包括ケアシステム」は中位概念として整理されています。地域共生社会、つまり、一人ひとりがかけがえのない存在として役割と居場所をもち、活躍しながら支え合いの輪を広げていくような地域をつくることは、地域で取り組まれているさまざまな活動が目指す最終的な目標であるといえます。そして、この目標を達成するためには、地域包括ケアシステムの

構築、つまり、住まい・医療・介護にかかる制度的な取り組みと、介護予防・生活支援にかかる制度的な取り組み(居場所づくりはこちらに含まれます)を一体的に推進していくことが必要になるということです。なお、図内の「包括的支援体制」と「地域包括ケアシステム」について、後者は高齢者を対象としたものですが、前者は障がいのある人たちやさまざまな生きづらさを抱える人など、すべての人を対象とした概念です。

ごく簡単にふたつの概念の関係を説明しましたが、地域共生社会と地域包括ケアシステムが、ともに同じ方向を目指した取り組みであることはご理解いただけたかと思います。



図 地域共生社会と地域包括ケアシステムの関係
 (出典) 原田正樹(2021)「特集1 地域共生社会の実現に向けた包括的支援体制の構築」『社協情報 NORMA』No.346.

地域共生社会のつくり方

それでは、地域共生社会の実現、つまり、一人ひとりがかけがえのない存在として役割と居場所をもち、活躍しながら支え合いの輪を広げていくような地域づくりに、私たちはどのように取り組めばよいのでしょうか。ここでは、「地域福祉」の考え方を参考にしながら具体的な方法を考えてみたいと思います。なお、「地域福祉」は、「地域共生社会」「地域包括ケアシステム」といった理念を具体化させるための方法に焦点をあてたものといえます。

地域福祉とは、制度的、非制度的な取り組みを活用しながら地域生活課題⁵を解決しようとするもので、その定義もさまざまですが、ここでは、「地域にあるさまざまな生きづらさを、地域で暮らす、働く、活動する、みんなの力で解消していこうとする取り組み」と理解しておきたいと思います。

⁵ 「福祉サービスを必要とする地域住民及びその世帯が抱える福祉、介護、介護予防(要介護状態若しくは要支援状態となることの予防又は要介護状態 若しくは要支援状態の軽減若しくは悪化の防止をいう。)、保健医療、住まい、就労及び教育に関する課題、福祉サービスを必要とする地域住民の地域社会からの孤立その他の福祉サービスを必要とする地域住民が日常生活を営み、あらゆる分野の活動に参加する機会が確保される上での各般の課題」(社会福祉法第四条)のこと。住民が地域生活を送るうえで課題となる事象全般を指す。

地域福祉を支える「みんな」とは

「地域で暮らす、働く、活動する、みんな」という部分をもう少し掘り下げてみるために、地域福祉を支える「みんな」を、「主役」「サポーター」「パートナー」という枠組みから考えてみます。

まず、地域福祉の「主役」となるのは、地域住民のみなさんを中心として、さまざまなボランティア組織や学校、企業、施設などの地域主体が想定されます。なおここでいうボランティア組織とは、いわゆるボランティア団体だけでなく、ボランティア(voluntary)、つまり自発的に活動をしている人びとのことで、たとえばスポーツチームや趣味の集まりなどを含めたものです。「主役」のおもな役割は、地域の優先課題とその解決策を検討し、解決に向けた具体的な活動に取り組むことです。

つぎに、「サポーター」として想定されるのは、行政や社会福祉協議会(以下、社協)、その他の専門職です。先に述べたように、課題や解決策の検討、実践に取り組むのは地域主体ですが、課題を見つけたり、解決策を検討したり、実践に効果的に取り組んだり、これらを地域主体だけですべて行うのは容易ではありません。たとえば法律や制度について説明したり、他地域での実践事例を紹介したり、課題について一緒に考えたり、情報やスキルをもった専門職が「主役」を支援することは課題解決にとって有効であると考えられます。

さいごに、「パートナー」とは、課題解決に向けた取り組みに参加する、おもに地域外の人びとです。最近では、定住人口、交流人口に加えて、関係人口⁶を増やすことが地域の持続的発展のためには有効であるとの考え方もありますが、ここでいうパートナーも同じような発想で、住民のように日常的に地域に関わるできないものの、イベントや課題解決に向けた対話や実践の場にもみ参加する人たちのことで、人口減少や少子高齢化の進展、また若年世代(働いている層)が多い地域において、地域福祉の重要な担い手となる可能性があります。地域と大学との連携が注目される近年においては、大学生も「パートナー」の貴重な候補といえそうです。

地域福祉の具体的なステップ

ここでは、地域福祉の具体的な進め方を5つのステップに分けて説明します。

① 地域の優先課題を発見・共有すること

まずは、地域で取り組むべき課題(生きづらさや困りごと)を決定することが地域福祉の出発点となりますが、ここで重要なのは、課題を発見するだけではなく、地域で共有するという視点です。唐突にお尋ねしますが、みなさんは、いまの地域生活に満足されていますか？不満はなにもありませんか？困っていることはないですか？おそらくだれしも、多かれ少なかれ、生きづらさや困りごとを抱えているのではないのでしょうか。もちろん、個々人が感じる生きづらさや困りごとを見逃さず、その解消に向けて活動に取り組むことが地域福祉ですが、地域の社会資源(地域のなかにいる／ある人、モノ、サービス、場所や情報、財源など)は有限ですから、「まず、なにから取り組むか」を決める必要があります。だからこそ、「個人的に考える地域の優

⁶ 定住人口はその地域に住んでいる人たち、交流人口はその地域を観光で訪れる人たち、そして関係人口は、たとえば「親戚が居住している」「祖父母の出身地域」「仕事で一定期間居住していた」など、交流人口以上定住人口未満の関わりをもつ人たちのこと。

先課題を発見する」だけではなく、それらを持ち寄って、「まず取り組むべき地域の優先課題を共有する」ことが、たいせつな第一歩となるのです。

なお、このステップを含め、地域福祉に取り組むにあたり、「共有」がとても重要なキーワードとなります。さまざまな価値観、境遇の人たちが「共有」するためには、だれかが鶴の一声で決めるのではなく、たがいの立場や意見の違いを尊重しながら、対等に意見交換を行い、既存の枠組みにとらわれずに新しい発想を生み出す「対話」を重ねることが必要です。そして「対話」を行うためには、形式的な意見交換の場ではなく、リラックスした雰囲気の中で、自由に自分の意見を表明でき、また他者の意見に傾聴できるような場(心理的・空間的な地域拠点と表現することができます)を設置することも有効な手段と考えられます。

② 地域の社会資源を把握すること

地域の優先課題を解決するための方法は、「解決策をあらたに考え、活動に取り組む」ことだけではありません。地域のなかに生きづらさを抱えるだれかがいるとき、その生きづらさを解消できるような人、モノ、サービス、場所や情報、財源などの社会資源があるとすれば、両者をつなぐことが課題解決のもっとも効率的な方法です。だからこそ、地域福祉に取り組む「主役」のみなさんは、自分たちが暮らす地域に、どんな「得意」をもった人やモノ、場所などがあるか、制度、非制度を含め、社会資源をしっかりと把握しておくことが重要です。

③ 行政、社協などの専門職とともに地域が抱える課題の解決策を導出すること

生きづらさと社会資源をうまくつなげられなかった場合、あらたな活動に取り組む、もしくは社会資源を結びつけることとなります。その際には、「主役」のみなさんだけではなく、行政や社協、その他の専門職のサポートを受けながら課題の解決策を導き出すことも方法のひとつです。ただし、最終的な判断は「主役」のみなさんで行うということは、忘れてはならないポイントです。地域の実情や強み、困りごとを本当に理解することができるのは、地域で暮らす、働く、活動する、「主役」のみなさんだけなのです。「サポーター」から提示された視点、発想、選択肢を参考にしながら、自分たちで考え、対話し、判断することにより、地域にとって有効な課題の解決策に出会えるはずですよ。

④ 多様な主体を巻き込みながら課題解決に取り組むこと

課題の解決策に出会えれば、実践に取り組んでいきましょう。ここでのポイントは、地域住民だけでなく、ボランティア組織や学校、企業、施設など、さまざまな地域主体を巻き込んで取り組むこと、そして場合によっては、地域内外の「パートナー」の協力を受けながら取り組むことです。この点について、「協働」というキーワードからさらに掘り下げて考えてみます。

協働とは、共有された目標を達成するために、さまざまな立場の主体(個人、団体など)が、対等な関係で、役割を明確にしながら、それぞれのできることにできる範囲で取り組むことです。地域が抱える課題の解決のために、「主役」も「パートナー」も、とにかくたくさんの人を巻き込んで、みんなで活動しよう！と考えたくなるのですが、持続可能な地域づくりのためには、「必要性に基づく協働」そして「戦略的な協働」という視点がたいせつになります。

「必要性に基づく協働」とは、地域に関わる主体をとにかくたくさん巻き込むという考え方ではなく、個人、団体の役割を明確にしたうえで、必要に応じて協働の輪を広げていくという考え方です。

地域に関わる主体をとにかくたくさん巻き込むことで意図せず起こる化学反応により地域に大きな変化が！…、という可能性ももちろんありますし、これも素晴らしい協働の形のひとつではありますが、自分(たち)が活躍できるかわからない状態で、たとえば毎週の会議に、たとえば毎月のイベントに出席しないといけないとしたらどうでしょうか。…、きっと疲弊感ばかりが蓄積してしまいます。もちろん、私たちが暮らす地域社会は、地域と全力で向き合う先人たちの熱い想いとたゆまぬ努力によって形成されてきたわけですが、価値観、境遇が多様化する現代において、先人たちと同じくらい地域のために汗をかける人材はなかなかいません。だとすれば、毎回全員が参加する協働の形ではなくて、「いま、地域のなかでこんなことに取り組もうとしていて、これを実施するためには××をしてくれる人と、〇〇ができる場所が必要だ。だから今回は、××が得意なAさんとグループBのメンバーに協力を依頼し、C小学校に〇〇ができるスペースを借りて、株式会社Dに情報発信についてアドバイスをもらおう」というように、個別の案件ごとに具体的な協働の形をデザインするほうが、それぞれの主体にとっても負担感がなく、また活躍できることに対するやりがいを感じながら、持続可能な地域づくりに取り組むことができると考えられます。「戦略的な協働」とは、ここで述べた案件ごとの具体的な協働のデザイン(だれがなにをするかを明確にし、場合によっては、個人、団体に協働を呼びかけること)を行うことを意味します。もちろん、この「戦略的な協働」は、地域外の主体を含めてデザインすることを想定しています。

よりよい協働のためには、2)においても述べた社会資源(地域のなかにいる／ある人、モノ、サービス、場所や情報、財源など)を的確に把握し、持続可能な協働をデザインするという視点が有効です。

⑤ 活動に対するふりかえりを行い、あらたな課題に取り組むこと

さいごに、「ふりかえり」の重要性について述べたいと思います。

地域福祉はもちろん、地域づくりというのは地域があるかぎりつづいていく、永続的な取り組みです。最初に設定した「優先課題」を完全に解決することは一朝一夕で達成されるものではありませんし、場合によっては完全な解決などは現実的ではないこともありえます。だからこそ、定期的にふりかえりを行い、課題解決の進捗(「どの程度生きづらさを解消できたか」「同じような生きづらさを抱えている人がほかにいないか」)はもちろんのこと、「取り組み内容は適切だったか」「戦略的な協働をリデザイン(見直し)する必要はないか」「目標設定は地域の状況に適合しているか」など、取り組みをさらに発展させることが必要となります。

なお、ふりかえりは、必要性は理解しているけれどもついつい後回しにしてしまうものです。1)の段階で、取り組みをどのようなタイミングで、どのような方法でふりかえりを行うか、しっかりと検討しておくことが重要です。

対話と交流の地域拠点をつくる

あらためて、地域共生社会について考えるとき、「価値観および境遇の多様性とどのように向き合うか」という視点をもっとも重要になると考えられます。具体的には、住民をはじめとするさまざまな地域主体、いいかえれば、地域に関わるすべての人が、他者の価値観や境遇を想像できるか、それに起因する生きづらさを想像できるか、そしてその生きづらさに寄り添い、行動することができるか、ということです。そのような「想像と行動の輪」を地域に広げていくことが、これからの地域づくりに求められているのではないのでしょうか。「想像と行動の輪」を広げるための具体的な方法には、地域ごとに創意工夫を凝らして、ということになりますが、「想像と行動の輪」は、さまざまな価値観、境遇の人びとが出会い、交流し、対話することからはじまる、これはすべての地域に共通するものであると考えられます。つまり、いま、地域に必要なのは「対話と交流の地域拠点」ではないかということです。以下、本章のまとめとして、「対話と交流の地域拠点」に期待される機能を示します。

- ✓ すべての人にとっての「居場所」であること
まずは、地域拠点がすべての人にとっての居場所となるように、だれでも訪れやすい、そして拠点を居場所と感じられるような居心地のよい空間をつくる必要があります。
- ✓ さまざまな人びとが時間・空間を共有し、たがいを知る場
想像と行動の輪を広げるためには、地域のなかにいるさまざまな価値観、境遇の人たちが出会うこと、そして時間・空間を共有するなかで、たがいを知ることが有効です。
- ✓ さまざまな人びとがつながる場
拠点にいる人たちが楽しめるコンテンツを盛り込むこともたいせつですが、自由に時間を過ごし、自由に人と人とが交流、対話し、自由に人びとつながる場となることで、地域拠点としての機能が高まります。
- ✓ ニーズ把握と専門職へのつなぎの場
拠点でのなにげない会話から得られた「生きづらさ」「困りごと」はそのままにしておかず、専門職に報告、相談することで、制度、非制度を活用した生きづらさ解消へとつなげることができます。
- ✓ みんなが得意なことに取り組める場
拠点にいる人びと一人ひとりが活躍できるように、得意なことに取り組める機会を創出することで、地域拠点がみんなにとって自分らしく、主役になれる居場所になるはずです。

また、このような地域拠点をつくるためには、以下の工夫が有効になると考えられます。

○ だれもが訪れたいくなる場づくり

よい地域拠点とは、無理に参加してもらおう場ではなく、自主的に訪れたいと感じてもらえる場です。だれもが訪れたいくなる場となるように、地域の方々がどのような場を求めているのかについて、アンケートや聞き取りなどを通じて明らかにすることが有効かもしれません。

「カフェメニューの充実」「いろんな人との出会い」「趣味に没頭できる」など、地域の想いに寄り添う拠点づくりに取り組んでみてください。

○ ターゲットを絞ったイベントなどの実施

地域拠点は、みんなにとっての居場所ですが、「訪れやすさ」を高めるためには、ときにターゲットを絞ったイベントなどを実施することも有効です。たとえば「男の料理教室」「夫婦で子育て相談会」「子どものためのスポーツ体験会」など、性別や年代などを絞り込むことで、ふだんはなかなか拠点を訪れる機会のない方が足を運びきっかけを提供できるかもしれません。

○ 多様な経歴、つながりをもつスタッフの確保

地域拠点の居心地のよさや訪れやすさの要因に、信頼できるスタッフの存在が挙げられます。なかなか地域や社会と関わるきっかけのない方にとって、知り合いはもちろんのこと、共通点(出身地域や年代、趣味など)のあるスタッフがいることは大きな安心感につながります。このような地域と個人をつなぐ存在は、ドアオープナー(扉を開ける人)とも呼ばれますが、拠点に多くのドアオープナーがいれば、きっと多くの人にとって居心地のよい居場所となるはずです。

ここまで、地域が抱える課題の多様化、複雑化と向き合い、地域共生社会を実現するための具体的な方法を、地域福祉、対話と交流の地域拠点という視点から述べてきました。ここで紹介した内容は、あくまで基本的な考え方です。みなさんがお住まいの地域における地域共生社会あり方を検討される際の参考にしてください。

2)枚方市の高齢者居場所事業

枚方市では、地域包括ケアシステムを基盤とした包括的な支援体制の構築や地域共生社会の実現に向け、高齢者が地域でいきいきと暮らすことができるようさまざまな取り組みを進めるなかで、地域包括支援センターに「近所の方々が気軽に集まれる場所」として活用してほしいと市民から空き家の提供がありました。しかし、居場所としてオープンするためには机や椅子、食器などの「物」とお世話役となる「人」が必要であることから、チラシの配布や回覧等による寄付及び協力の呼びかけなど、開設準備にはかなりの時間を要したといった事例がありました。

また、人と人とのつながりが希薄になっていることによる課題を解決する手法のひとつとして、複数の市町村において行政主導で「近所の方々が気軽に集まれる場所」を創る支援が始まりました。

そこで枚方市でも、居場所から地域の助け合い・支え合い活動への発展を目指し、居場所の開設に際して必要となる備品等の購入費や簡易なバリアフリー工事の費用を補助する高齢者居場所づくり事業を平成29年に開始しました。

事業の開始にあたり、誰もが歩いて通える場所にあることを目指し、2年で100か所の登録を目標に掲げたうえで、事業の趣旨と周知に努めました。

枚方市には、高齢者を中心とした地域の課題を整理し、解決のための協議やネットワーク化など、地域住民や関係者の持つ豊かな経験や知識を活かすことができるように、小学校区を単位とする「元気づくり・地域づくりプロジェクト」(第2層生活支援コーディネーター・第2層協議体)の取り組みがあります。

高齢者居場所づくり事業は、元気づくり・地域づくりプロジェクトにおいて「行き場がない」、「集まる場がない」、「福祉の担い手が疲弊している」などの地域課題を抱える小学校区の共感を得て、それぞれの小学校区で特色のある「高齢者居場所」の登録に至りました。

今回のインタビュー調査は、この「元気づくり・地域づくりプロジェクト」から発足した高齢者居場所へ依頼したものです。

そして、枚方市では現在でも110か所の高齢者居場所が登録されています。コロナ禍で外出自粛など活動すること自体が難しく、人と物理的な距離を保つことが困難な場もあります。それでも活動を継続されている高齢者居場所や活動を再開されている高齢者居場所など、それぞれの高齢者居場所がより良い方法を模索しながら頑張っておられます。枚方市としても、市職員もしくは地域包括支援センターの専門職が関与し、活動の継続を積極的に支援しています。

これからも活動が継続すること、そのために専門職が関与することで、交流から助け合いの活動に発展していく、または活動に広がりができるよう、それぞれの「高齢者居場所」の特性にあわせた支援を行っていきたいと考えています。

2. 居場所づくりと地域づくりに関するインタビューの調査結果

1) 調査の方法

本調査では、地域づくりと居場所づくりを連動させて活動に取り組まれているみなさまに半構造化面接とよばれるインタビュー調査を実施しました。これは、事前に準備した質問項目を示しながら、あまり質問の順番、内容にはこだわりすぎず、地域、そして居場所について、自由に語っていただく方法です。

一件あたりのインタビュー時間は60分から90分程度で、各団体、1名から複数名のお話を伺いました。インタビューの内容は、許可を得て IC レコーダーに録音し、全文を文字起こししたうえで、質的データ分析ソフトを用いて分析を行いました。

2) 調査地域および対象団体の概要

下表1に示すのが、今回調査にご協力いただいた地域および団体の概要です。枚方市では、創意工夫を凝らして、高齢者の居場所づくりに取り組まれている数多くの団体がありますが、今回は、前述のとおり、地域づくりを意識しながら居場所づくりに取り組まれる団体を選定し、調査を行いました。

表1 インタビュー調査の概要

校区名	団体名(敬称略)	日時	場所
枚方第二	枚二みつば	2021年12月2日 15:00~16:30	枚方市市民会館第3集会室
香里	ほっとカフェ	2021年11月18日 13:00~14:30	枚方市立図書館香里園分室 1階 香里会館
明倫	チカラのみせ処 宮ノサポ	2021年11月1日 16:00~17:30	チカラのみせ処 宮ノサポ
津田	ほっこりクラブ津田	2021年12月9日 15:00~16:30	津田集会所
川越	釈尊寺ふれあいの家、 ふれあいのつどい処	2021年12月16日 13:00~14:30	釈尊寺第一住宅集会所
菅原東	ぶらっとホーム	2021年12月16日 15:00~16:30	代表者様宅
東香里	東香里元気づくり 地域づくりVタイム	2021年11月18日 13:00~14:30	東香里元町会館
西長尾	西長尾元気づくり 地域づくり	2021年11月25日 16:00~17:30	代表者様宅

※校区名は校番順に記載しています

また、今回の調査対象地域の現状を理解するひとつの指標として、各地域の人口および年代別割合をまとめたものが、下表2です。

表2 調査対象地域の人口動態(令和4年6月1日現在)

校区名	人口 (世帯数)	0～5歳 (割合)	0～14歳 (割合)	15～64歳 (割合)	65歳以上 (割合)	75歳以上 (割合)
枚方第二	10,968人 (5,410世帯)	569人 (5.2%)	1,384人 (12.6%)	7,213人 (65.8%)	2,371人 (21.6%)	1,232人 (11.2%)
香里	11,779人 (5,134世帯)	630人 (5.3%)	1,787人 (15.2%)	4,590人 (59.4%)	2,800人 (23.8%)	1,468人 (12.5%)
明倫	6,008人 (3,100世帯)	325人 (5.4%)	699人 (11.6%)	3,631人 (60.4%)	1,678人 (27.9%)	935人 (15.6%)
津田	11,075人 (5,322世帯)	373人 (3.4%)	1,210人 (10.9%)	6,601人 (59.6%)	3,264人 (29.5%)	1,583人 (14.3%)
川越	6,149人 (3,292世帯)	153人 (2.5%)	428人 (7.0%)	3,157人 (51.3%)	2,564人 (41.7%)	1,422人 (23.1%)
菅原東	14,082人 (5,894世帯)	773人 (5.5%)	2,156人 (15.3%)	7,833人 (55.6%)	4,093人 (29.1%)	2,324人 (16.5%)
東香里	6,474人 (2,818世帯)	317人 (4.9%)	806人 (12.4%)	3,547人 (54.8%)	2,121人 (32.8%)	1,172人 (18.1%)
西長尾	8,038人 (3,481世帯)	267人 (3.3%)	906人 (11.3%)	4,725人 (58.8%)	2,407人 (29.9%)	1,153人 (14.3%)
<参考> 枚方市	396,773人 (183,980世帯)	16,708人 (4.2%)	48,318人 (12.2%)	234,324人 (59.1%)	114,131人 (28.8%)	60,421人 (14.2%)

(出典:枚方市ホームページ)

※校区名は校番順に記載しています

※各項目のうち、もっとも数値(人口および割合)が大きいものを■、二番目に大きいものを■、三番目に大きいものを■で塗布しています。

3)調査結果

次ページから、各校区におけるインタビュー調査の結果について述べていきます。

インタビュー結果の内容は、校区ごとに、【地域の概要】【活動の内容】【活動の特徴・工夫】の項目で整理しています。なお、【活動の内容】については、居場所づくりに取り組む団体が実施しているものを中心に紹介しますが、本報告書では、居場所づくりと地域づくりの連動性に着目するため、一部、校区内で実施されている他団体の活動についても言及します。

枚方第二校区 枚二みつば

【地域の概要】

枚方市中心部に位置する地域で、枚方市駅や市役所、警察署や複数の学校などがあり、多くの人が通勤、通学しています。

人口動態から、0～64歳までの割合が高く、とくに現役世代の割合は市内でもっとも高いことがわかります。

枚方第二校区では、地域内の3つの自治会館を活用して、以下の活動に取り組んでいます。

【活動内容】

居場所づくり

校区内の3つの自治会館では、月1回、居場所が同時に開催されています。居場所での活動内容は「カフェ」「脳トレゲーム」「体操」で、それぞれの自治会館で実施される活動の内容は月ごとに持ち回りで変わります。「脳トレゲーム」および「体操」の参加者の多くは活動後、カフェに徒歩で移動し、最後はみんなでゆったりとした時間を過ごすそうです。なお、3つの自治会館はそれぞれ離れているため、カフェへの移動も参加者にとって、よい運動になっています。3つの居場所を同日、同時刻に開催し、参加者がそれぞれの会場に移動するという意図的な仕掛けの効果により、参加者の活動量も増加しているようです。

カフェでは、コーヒー、紅茶などの飲み物にお菓子を付けて、1杯100円で提供しています。なお、お手頃な価格で提供されるコーヒーですが、カフェ当日に購入した豆を挽いて淹れるというこだわりの逸品です。

脳トレゲームは、社会福祉協議会の協力を得て、なぞなぞやコミュニケーションマーじゃん(通常の5倍ほどの大きさのパイを使用し、複数名でチームを組んで行うマーじゃんです)などで楽しい時間を過ごすものです。

そして体操は、地域包括支援センターの協力のもと、「ひらかた元気くらわんか体操」や座ったままできるエクササイズなどで体を動かすものです。

居場所の運営にあたっては、民生委員経験者を中心とするボランティアスタッフが揃いのエプロンを着用し、楽しみながら活躍してくれています。

居場所では参加カードが準備されており、参加するごとにシールを貼り付けていき、ポイントが貯まれば景品と交換するという仕組みを取り入れています。

なお、1周年記念やお正月などの節目には、3つの居場所が一堂に会し、大きな

催しとしてゲームを行ったりぜんざいをふるまったりと、継続的に参加したくなるような居場所づくりに取り組まれています。

生活アンケート

新型コロナウイルスの感染拡大により、活動が中止に追い込まれた時期、枚二みつばでは、参加者全員を対象に生活アンケートを実施しました。この生活アンケートは、参加者の安否確認を兼ねたもので、返信用封筒を添付して対象者に郵送しました。124名に送付したアンケートは104名から回答が得られ、回答が得られなかった20名については、地域の民生委員が戸別訪問を行いました。

今後も、地域活動を進めるにあたって障壁となる事象が起きないとはかぎりません。そんななかで、枚二みつばが実施した生活アンケートは、つねに「いま、困っている人たちはどこにいるか」「いま、見えにくくなっている生きづらさはなにか」を想像し、「いま、自分たちにできることはなにか」を考え、行動に移すことが地域福祉の基本的な考え方であることを示す事例です。

社会福祉協議会、地域包括支援センターとの連携

枚二みつばの活動は、校区コミュニティ協議会が社会福祉協議会、地域包括支援センターおよび行政とも密に連携しながら進められています。四者が枚方第二校区における地域福祉についてともに考え、その担い手の発掘、育成による持続可能な地域づくりに取り組んでいます。

具体的には、地域の行事を若者、子育て世代が積極的に参加していくようなものに変更したり、地域内の組織で役員となった若い世代の住民が活動しやすいような環境を整備したり、今後の地域の方向性について校区コミュニティ協議会と対話を行ったりといった連携に取り組むほか、地域福祉の門戸を開放していく、つまり、専門的な知識や経験がなくても地域のためにできることを明確にし、積極的に情報発信するなどの多角的なアプローチが採られています。このような取り組みを通じて、住民をはじめとするさまざまな地域主体が一丸となって地域が抱える課題を解決していこうとする参加型の地域福祉への展開を目指しています。

【活動の特徴・工夫】

枚方第二校区では、活動に関わる人たちの「楽しみ」をキーワードに、変化を恐れずにさまざまな事業にチャレンジしています。「引き継ぐものはしっかりと引き継いで、新しい形で取り組むべきものは大胆に刷新する」という基本理念のもと、活動に関わった人たち、とくにはじめて地域と関わる若年世代(働いている層)が、のびのびと地域活動を行い、「地域に関わってよかったな、楽しかったな」と思える地域づくりに取り組んでいます。

香里校区 ほっとカフェ

【地域の概要】

香里校区は、香里ヶ丘地区と香里園四町、南中振の一部から構成されています。校区を二分する尾根道が走っており、地形上の起伏の多いことも地域の特徴です。近年は、両地区とも住宅開発が進み、若い世代の転入が増えて、街のたたずまいが変わってきました。

人口動態から、人口規模が大きいこと、また0～64歳までの割合が高い地域であることがわかります。

香里校区では、車いすを利用される方も参加しやすいように、入り口までがスロープになった第二香里会館を活用して「ほっとカフェ」を運営しています。

【活動内容】

ほっとカフェ

月2回、20名ほどが参加するカフェを運営しています。香里校区では、以前から、高齢者を対象としたいきいきサロンが開催されてきましたが、新しく設置したカフェは、「先生と生徒、迎える側と迎えられる側ではなくて、みんなで一緒にやりましょう」をコンセプトとして、運営者、参加者を区別することなくみんなが楽しめる居場所づくりに取り組んでいます。いきいきサロンに比べると、若い年代を含めた幅広い世代の方が参加していることも特徴です。

カフェの運営でとくにこだわっているのは飲食物のクオリティです。カフェと銘打つからには、ということで、コーヒーや紅茶、お茶もインスタントではなく、ドリップしたものや茶葉から淹れたものを提供しています。お茶のお供であるお菓子にもこだわり、ときには参加者が手作りのカステラなどを差し入れてくださるそうです。

また、ミニネイルサロンなど、参加者に喜びを提供するためのイベントを実施していることも特徴です。ミニネイルサロンは、ネイルが得意な参加者の協力を得て実施しており、普段は爪の手入れをする機会が少なくなった参加者たちに、それぞれの好みにあったネイルを施すもので、手入れが終わったあとには、参加者どうしが、きれいになった爪をととても嬉しそうに披露しあう様子がみられます。

その他、ほっとカフェでは、健康測定や大学生との交流など、参加者が楽しみや生きがいを感じられる活動を取り入れながら、みんなの居場所づくりに取り組まれています。

ほっとカフェでは、新型コロナウイルスの感染拡大により、こだわりのコーヒー提

供などが難しくなったこともあり、「コロナ禍でもできること」を模索し、実践しています。そのひとつがキルト展示会です。これは、地域のなかに、さまざまな色の布地を絵の具に見立てて絵画作品を作成するキルトアートづくりに取り組む方がおられたことから、カフェでの作品展の開催を依頼し、実現したものです。作成者が生地染色からすべてご自身の手で作り上げたキルトアートの展示会は、作品を觀賞した人にとっても感動と癒やしの時間となりました。

【活動の特徴・工夫】

香里校区での活動は、以前から積極的に取り組んできたいきいきサロン、子育てサロンなどの事業とは異なる新しい居場所としてカフェを設置し、さまざまな人が参加し、楽しく交流できる場にしようとするものでした。

カフェ運営において意識されているのは、ボランティアスタッフと参加者の垣根をなくすことです。参加者という立場であってもカフェの準備を進んで行ったり、得意なことを披露したりと、みんなが役割をもち、みんなが活躍できる居場所づくりに取り組まれています。

また、カフェの運営にあたっては、いわゆる「一本釣り」により、多くのボランティアスタッフの協力を得ています。カフェの世話役となるスタッフが、民生委員を経験した住民など、この人なら！と思う方に積極的に声をかけすることで、カフェでも活躍してくれる新たな人材を発掘しています。「担い手不足」がさまざまな地域で課題となっている昨今ですが、まずは自分の信頼できる人を、そしてつぎはその人が信頼できる人を、というように、ゆるやかに人のつながりを広げていくことが、地道ではありますが、地域の担い手を確保していくための一番の近道なのかもしれません。なお、ボランティアスタッフのみなさんは、日常的なコミュニケーションはもちろんのこと、区民体育祭をはじめとする地域行事と一緒に参加するなど、さまざまなお付き合いを大切にしています。

そして、大学生の継続的な関わりも特徴のひとつです。学園都市でもある枚方市では、それぞれの地域の居場所に大学生が参加している例は少なくありませんが、香里地区では、数年にわたり、大学生の実習を受け入れることで、さまざまな効果を生み出しています。カフェスタッフや参加者と大学生が交流することの喜びのみならず、大学生の成長を目にすることが新たな楽しみにつながり、異なる年代、立場の人びとが対話、交流することで学びあい生まれます。毎年、このような受け入れを続けるからこそ構築される信頼関係があり、またそのような関係が構築されているからこそ得られるものもあるようです。

明倫校区

チカラのみせ処 宮ノサポ

【地域の概要】

明倫校区は、宮之阪駅周辺に位置し、国指定特別史跡の百済寺跡公園など、枚方の歴史を感じさせる文化財のほか、商店街や学校、そして住宅街が立ち並ぶとても賑やかな地域です。

人口動態から、0～5歳の小さなお子さんがいる子育て世帯および仕事をしている人が多いいわゆる現役世代(15～64歳)の割合が高いことがわかります。

明倫校区では、宮之阪中央商店街振興組合が中心となり、閉店した喫茶店を活用したコミュニティスペース「チカラのみせ処宮ノサポ」で、以下の活動に取り組んでいます。

【活動内容】

宮サポカフェ

週3日は高齢者の居場所としてカフェを運営しています。おいしいコーヒーとケーキがお手ごろな価格で楽しめるとあって毎回多くの参加者でにぎわっています。参加者のなかには、バスを利用して校区外から参加される方もおられます。カフェの運営にあたっては、長年にわたり地域活動に取り組む方からあらたに地域活動に関心をもった人まで、多くのサポーター(住民ボランティア)が活躍しています。

ちよいサポ

サポーターが、自分たちの得意なこと、地域のなかでお手伝いできることを記載したものをコミュニティスペースに掲示し、サポートを必要としている人はそれを見て、サポーターに活動を依頼します。毎日なんらかの形でオープンしているコミュニティスペースが、お手伝いできる人と、お手伝いを求めている人をつなぐ、ボランティア活動のプラットフォームとしての機能を果たしています。

子ども食堂

月に2回開催される子ども食堂には、30人ほどの子どもたちのほか、高齢者が参加して食事を楽しんでいます。友だちどうしで誘い合わせて参加する子どもたちや長年参加してくれている子どもたちもいます。塾に通う前に食事する子どもたちもあり、働く親御さんの支援にもつながっているようです。

障がいのある人たちの就労支援

コミュニティスペースでは、週2日、企業などへの就労を目指す障がいのある人たちが、カフェスタッフとして接客、利用者との交流する就労支援を行っています。なお、こちらでは、商店街振興組合が地域づくりに取り組むという強みを生かし、コミュニティスペースでのカフェスタッフ体験のほかにも、商店街にある飲食店などを活用し、さまざまな業種、業態での就労を体験することができます。

ノルディック・ウォーキング

市内各地で取り組まれているノルディックポールをコミュニティスペースでもレンタルすることができます。明倫校区では、揃いのジャケットを着用し、子どもたちの下校時刻に合わせてウォーキングを行うことを推奨しており、健康づくりと子どもたちの見守り活動を同時に行っています。

写真展

地域内のスーパーマーケットの空きスペースを活用し、地域の過去の姿を記録した写真展を開催しました。これは、高齢者の外出につながるようにとサポーターが発案したもので、夫婦で、親子で、お孫さんと、また住民どうしが楽しそうに地域について語り合う様子がみられました。

【活動の特徴・工夫】

明倫校区では、「商売人はものを売るだけでなく、地域とつながることが必要」との理念から、平成26年ごろから宮之阪中央商店街振興組合が中心となってさまざまな活動を展開してきました。その過程で、市役所健康福祉部や商工振興課のほか、地域包括支援センター、市民活動センター、近隣大学の学生など、多様な主体と協働していることが特徴のひとつです。

コミュニティスペース「チカラのみせ処宮ノサポ」が、ほぼ毎日のようにオープンしており、「いつでもだれかに会える場所」となっているほか、ボランティア活動のプラットフォーム機能を備えるなど、居場所が人と地域をつなぐ役割を果たしていることも地域の大きな強みです。

カフェや子ども食堂の運営、ちょいサポでボランティアを行うサポーターには、商店街で使用できる地域通貨(宮サポチケット)で謝礼が支払われており、商店街の活性化にもつながっています。

また、活動全体のなかで、「満足度」が重要なキーワードになっています。コミュニティスペースや活動そのものが、参加者はもちろんのこと、ボランティアを行うサポーターにとっても楽しさ、喜び、生きがいを提供するような居場所となり、そこに関わるすべての人の「満足度」を高めることにつながっています。

津田校区

ほっこりクラブ津田

【地域の概要】

近年は、第二京阪道路、JR学研都市線が開通し、津田サイエンスヒルズなど工場が多く開発される地域ですが、春日神社や古民家もあり、新旧が交わる街並みのなかで、さまざまな住民が暮らしています。

人口動態から、人口規模が大きく、市全体の数値と比較すると、やや高齢化率が高いことがわかります。

津田校区では、津田集会所を活用し、地域の居場所である「ほっこりクラブ津田」を中心に、下記の活動に取り組んでいます。

【活動内容】

居場所づくり

津田校区は地域の特性上、新旧の住民が混在して暮らしています。そこで、かつては杵や臼を使った餅つき大会、地域の運動会やゲートボール大会、防災訓練などを実施し、地域の一体感を高めることに取り組んできました。

その流れで、健康維持をキーワードに地域の一体感を高め、だれもが地域で生き生きと過ごすための居場所として、地域包括支援センターとも連携しながら「ほっこりクラブ津田」を設立しました。

月4回、30名ほどが参加して実施している居場所では、「ひらかた元気くらわんか体操」のほか、手芸、編み物、カラオケ、麻雀など高齢の方が参加したくなるような活動と、ひなまつり作品展など、季節ごとの行事を地域のさまざまな主体と協働しながら実施しています。

ほっこり新聞

地域の新しい居場所として設立した「ほっこりクラブ津田」ですが、新型コロナウイルスの感染拡大により活動が困難となりました。そこで、地域のつながりが希薄化することを防ぐとともに、地域の社会資源(人や場所、モノ)をさまざまな形でつなげていくため、地域のさまざまな話題を提供する「ほっこり新聞」を発行しています。紙面では、「ほっこりクラブ津田」の紹介はもちろんのこと、フレイル予防、季節の便りや地域の行事、地域の名所についても紹介しています。新聞は、年3回ほどのペース(不定期)で、各回1000部が発行され、各自治会への回覧のほか、老人会、地域内のひとり暮らし高齢者、地域のボランティア団体に配布されるほか、

地域包括支援センター、津田生涯学習市民センターに設置し、自由に閲覧、持ち帰ってもらえるようにしています。

「ほっこり新聞」は、新旧の住民があらためて地域について知り、地域と関わるきっかけを提供するなど、地域の一体感を高めるための重要なコミュニケーションツールとなっています。

しゃべり場

健康維持をテーマとした「ほっこりクラブ津田」に加え、地域住民の想いをより深く知るための対話の場として、「しゃべり場」の設立を検討しています。これは、新型コロナウイルス感染拡大前に、地域包括支援センターが運営していたカフェをベースとして、参加者が個人的なことを含めてとにかく自由にしゃべることができる場を目指しています。副次的な効果として、参加者が楽しく自由にしゃべることにより、脳の活性化にもつながるのではと期待されています。

校区コミュニティ協議会や老人会、学校などとの連携

「ほっこりクラブ津田」の取り組みは、校区コミュニティ協議会や老人会、学校などと協働しながら展開されています。

校区コミュニティ協議会とは地域が目指す方向性について対話を重ねています。また、老人会とは津田集会所の運営について協力体制を構築しているほか、ひなまつり作品展で、老人会会員の作品を展示しています。学校などとの連携について、先に紹介したひなまつり作品展で、地域にある保育園の園児や中学校の美術クラブに所属する生徒の作品を展示しているほか、集会所の看板も美術クラブの生徒が制作したものです。そのほか、地域のボランティア団体が小学校の花づくりや中学校の大掃除に協力するなど、地域のさまざまな場所で、さまざまな形で連携した取り組みがみられます。

【活動の特徴・工夫】

津田校区での取り組みは、「地域の一体感」を高めることを目的に、さまざまな地域主体が協働しながら地域づくりに取り組んでいます。

「地域の一体感」を高めるための方法として、居場所づくりや行事の開催だけでなく、「ほっこり新聞」に代表されるような丁寧で積極的な情報発信にも力を入れています。また、「しゃべり場」や他機関との連携のあり方にも示されているように、「地域の一体感」を高めていくためには、情報を発信するだけでなく、住民や関係機関の声にしっかりと耳を傾けることが重視されています。

その他、津田校区では、他地域で地域づくりに取り組む方々との意見交換、連携も積極的に行っています。

川越校区

ふれあいの家／ふれあいのつどい処

【地域の概要】

校区内に天の川が流れ、のどかな田園風景が広がる地域のなかに、集合住宅と新興住宅、旧家が存在しています。

人口動態から、高齢化率および後期高齢者の割合が市内でもっとも高い、高齢化が非常に進んだ地域であることがわかります。

川越地区では、旧店舗住宅をはじめ、5つの集会所などを活用し、「ふれあいの家」「ふれあいのつどい処」の名称で、居場所づくりに取り組んでいます。

【活動内容】

居場所づくり

川越地区では、集合住宅内の集会所をはじめとする5カ所で、月1, 2回で居場所を開催しています。活動内容は、「ひらかた元気くらわんか体操」のほか、小物づくりや囲碁、将棋、頭の体操、茶話会などです。川越地区におけるそれぞれの居場所です。たいせつにされているのは「地域での生きがいを自ら率先して活動する場を提供する」ことで、たとえば手芸が得意な参加者が講師役を務めるなど、運営者、参加者と区別するのではなく、みんなが率先して参加し、活躍できる場づくりに取り組んでいます。

歴史探訪

居場所への男性の参加者が少ないことから、男性が参加しやすい活動として、「歴史探訪」が企画されました。校区内には史跡も多く、地域の歴史に詳しいボランティアスタッフが説明しながら30分ほど地域を散策します。参加者は、歴史探訪を通じて地域の新たな発見に出会えることを楽しみにしているようです。

子ども食堂

川越校区では、月2回、校区コミュニティ協議会主催で、居場所のボランティアスタッフも一部参加しながら子ども食堂を運営しています。小学校の家庭科室を利用して実施する子ども食堂には、多いときには30名をこえる子どもたちが参加し、5名ほどのボランティアスタッフが運営しています。なお、スタッフのなかには川越小学校の卒業生である大学生が参加してくれており、川越校区において、地域づくりへの想いが脈々と受け継がれていることがよくわかります。

校区コミュニティ協議会との連携

川越地区における居場所づくりは、運営者の一部が校区コミュニティ協議会にも所属していることから、夏祭りや体育祭、長寿のつどいなどの地域行事、またサロン活動と連動して実施されています。活動の選択肢が複数あることに加え、それらが連携していることは、参加者にとっても、地域生活を送るうえでの安心感につながっています。

【活動の特徴・工夫】

川越地区における活動は、居場所づくりの理念である「地域での生きがいを自ら率先して活動する場を提供する」にも示されているように、住民一人ひとりの個性や得意、専門性を活かすことを意識して取り組まれています。居場所で参加者が講師役を務めたことや歴史探訪のほかにも、住民が得意なことを地域づくりに生かす事例が多いようです。得意なことを生かした活躍の場は、「生きがい」へとつながるものです。なお、このような取り組みは、地域のさまざまな会議でたがいの職業や資格、得意なことについて知る機会があるため、そこで得た情報をもとに、なにか困りごとがあった際に相談しあうような雰囲気醸成されているからこそできることなのだそうです。個性や得意、専門性を生かすためにはまずはお互いを知ることから、という地域づくりのエッセンスが詰まった取り組みです。

また、居場所の運営スタッフの多くが民生委員であることも、居場所づくりと地域づくりの連動性を高めています。民生委員として行う見守り活動や把握した地域方法を適切に共有しながら、「気になる人」の暮らしを支えています。居場所は、いわゆる「井戸端会議」が果たしてきた役割(たがいの近況報告やさまざまな情報の共有など)を担う側面もありますが、これも、地域のなかで顔見知りの関係ができているからこそ成立するものです。

川越地区における活動の特徴のひとつに、学校との協働が挙げられます。校区コミュニティ協議会が主催する子ども食堂を小学校の家庭科室で実施しているほか、地域住民と小学生と一緒に給食を食べながら会話を楽しむ世代間交流事業なども開催されてきました。枚方市において推進されているコミュニティ・スクールの取り組み(「学校と家庭、地域が連携・協働し、子どもたちの健やかな成長を支えていく学校づくりを進めていくこと」との関わりもあり、地域の代表者が学校を頻繁に訪れ、意見交換を行っています。学校と関わる機会が増えることで、当然、子どもたちと関わる機会も増えます。子どもたちの様子から地域のさまざまなこと(気になることや困りごとを含めた)が見えてきます。とくに地域とのつながりが希薄化しているとされる若年世代(働いている層)との関わりを、子どもを通じて紡いでいくような取り組みが、これからの地域づくりにも求められています。

菅原東校区 ぶらっとホーム

【地域の概要】

JR学研都市線「長尾駅」南側丘陵に誕生した緑豊かなベッドタウンです。枚方市のなかでも人口が多い校区の1つであり、児童数も増え、教室が不足する一方で、高齢化率も年々上がってきています。

人口動態から、人口規模が市内でもっとも大きく、0～14歳までのお子さんのいる割合がもっとも高い、子育て世帯が多い地域であることがわかります。

菅原東校区では、地域づくりに取り組む「NPO 法人すがはらひがし」が「ぶらっとホーム」をはじめとする居場所づくりに取り組んでいます。

【活動内容】

ぶらっとホーム

「いつでもだれもが気軽に集える場所」をテーマに、ぶらっと立ち寄ることができるコミュニティサロンとして立ち上げられたのが「ぶらっとホーム」です。これは、校区内全体の約半数にあたる世帯に対して実施した地域生活に関するアンケート調査の結果を踏まえ、立ち上げへと至ったものです。ぶらっとホームは、運営主体であるNPO 法人すがはらひがしの本部事務所を活用し、年間150日程度、活動しています。

いきいきサロン

高齢者がだれでも立ち寄ることのできるいきいきサロンは、校区内にある自治会館の持ち回りで月1回開催しています。サロンでは、脳トレや茶話会のほか、正月の寄せ植えなど、季節を感じることのできるイベントも積極的に取り入れています。

いきいき広場

毎週土曜日に、子どもたちの居場所として、「いきいき広場」を開設しています。以前は教育委員会を通じて募集したスタッフにより運営されていましたが、現在は、NPO 法人すがはらひがしおよび校区福祉委員会の子育て支援活動として、地域のボランティアスタッフにより、年45回開催されています。いきいき広場では、子どもたちに遊びと交流の居場所を提供するほか、遠足やクリスマス会などのイベントを実施しています。

子ども食堂

現在、多くの地域で実施されている子ども食堂について、晩ごはんを提供するのが一般的ですが、菅原東校区では、月2回、学校の授業がない土曜日に、小学校を活用して、朝ごはんを提供しています。これは、さまざまな地域活動を行うなかで、朝ごはんを食べていない子どもたちが多く、栄養状態が気になるようになったことから、以前は晩ごはんを提供していましたが、朝ごはんに変更しました。

新型コロナウイルスの感染拡大以降は、お弁当も準備するようになり、学校でみんなと一緒に食べるか、お弁当を持ち帰って家で食べるかを選ぶことができます。なお、学校で朝ごはんを食べる子どもたちの多くは、そのまま「いきいき広場」に参加することが多いようです。

コミュニティ Jr

菅原東校区における地域づくりにおいて、重要な役割を果たしているのがコミュニティ Jr(ジュニア)たちです。地域にはさまざまな団体があり、地域住民が持ち回りで役職を担っていますが、多くは1年もしくは2年任期で交代してしまいます。とくに若年世代(働いている層)のうち、はじめて地域に関わる人たちにとってはイベントをはじめとする地域活動や地域のつながりを知る機会になっており、役職を退いたあとも地域に関わりつづけたいと思う人は少なくないようです。とはいえ、各団体から選出された方々で取り組むことの多い地域活動に所属団体なしのボランティアとして参加するのは勇気がある…、ということで、コミュニティ Jr という任意団体を立ち上げ、地域活動の担い手として活躍してもらうようになりました。

現在では、30代から40代くらいの地域住民が、性別を問わず、20人ほどコミュニティ Jr として活動しているそうです。コミュニティ Jrのメンバーたちも、地域に友人ができた喜んで、行事のあとの懇親会を含め、地域活動を楽しんでいます。

【活動の特徴・工夫】

菅原東校区では、「人」を中心に、さまざまな活動に取り組まれています。ぶらっとホームを設立するにあたって実施した住民アンケートや、いまや地域の重要な担い手であるコミュニティ Jr の立ち上げは、地域の人びとの想いに耳を傾け、住みよい地域を目指した取り組みだといえます。インタビューのなかでも、「人に恵まれて地域づくりに取り組んできた」「地域の財産は人」ということばが聴かれ、菅原東校区における地域づくりの中心にはいつも「人」がいることが、よくわかります。

また、活動に取り組むにあたっては、他地域との連携も意識されています。枚方市内においては、居場所づくりや地域づくりに取り組まれている方の多くが民生委員もしくは校区福祉委員を経験しているため、地域をこえたつながりのなかで、意見交換を行ったり、励ましあったりしながら活動を行っています。

東香里校区

東香里元気づくり地域づくり V タイム

【地域の概要】

東香里校区は寝屋川市と交野市に隣接し、市内最南端の幹線道を挟んで、両側のほとんどが閑静な住宅地となっており、5自治会で構成されています。人口密度は比較的低く、少子化と高齢化が進んでいます。

人口動態から、高齢化率(65歳以上人口の割合)および後期高齢者(75歳以上)の割合がとくに高い地域であることがわかります。

東香里校区では、「東香里元町会館」および「東香里京阪住宅自治会館ルミノーズ」を活用し、「東香里元気づくり地域づくり V タイム」として居場所づくりに取り組むとともに、校区福祉委員会として世代間交流事業を実施しています。

【活動内容】

居場所づくり

校区コミュニティ協議会、老人会、民生委員、校区福祉委員会が協力して、月2回、地域内の異なる拠点を活用して居場所づくりに取り組んでいます。毎回の居場所には、30人程度が参加しています。居場所づくりでは、健康体操のほか、参加者みんなが楽しめる脳トレやカラオケ、手芸・工作などを行うほか、得意な方に手品や歌を披露していただいたり、男の料理教室などターゲットを絞った活動を取り入れたり、さまざまな工夫がなされています。なお、手芸・工作を行う際には、「家に持ち帰って飾れるくらいのを仕上げることを心がけているそうです。せっかく時間を使って作るのだから、作品の質にもこだわることで、参加者も真剣に楽しみながら作業を行っています。

また、男性の参加者が多いことも東香里校区の居場所の特徴です。これは、参加者が、それぞれの得意なことを披露する機会があることに加え、運営スタッフにも男性がいるため、男性が参加しやすい雰囲気がつくられていることも要因と考えられます。

世代間交流事業:七夕サロン、作品展、スポーツ祭

東香里校区では、校区福祉委員会が実施する世代間交流事業とも連動しながら居場所づくりに取り組まれています。

世代間交流事業は、地域における福祉活動が、高齢者および子育て世代、とくにお母さんと赤ちゃんだけを対象としていた状況を踏まえ、地域福祉を考えるうえ

では、働いている層や、小学生、中学生とその保護者を地域に積極的に巻き込むことが必要との認識から取り組まれているものです。具体的には、寸劇やクイズを楽しんだあと、体育館の天井にも届くような笹に飾りを施す「七夕サロン」、地域の方々の手作り作品を展示する「作品展」、親子を含め、地域住民全体で楽しむことができる「スポーツ祭」が実施されています。

このうち、「七夕サロン」や「スポーツ祭」は、さまざまな年代が参加者として楽しむほか、若年世代(働いている層)が積極的に手伝いを行うそうです。また、「作品展」では、当日、会場を訪れることができないけれども作品だけでも参加したい、という高齢の制作者の想いを形にするため、作品を預かり、搬入搬出を行うことも少なくありません。

なお、東香里校区では、だれもが定期的に地域と関わるができるように、世代間交流事業と居場所、その他の地域活動の実施時期を工夫しています。

【活動の特徴・工夫】

東香里校区では、地域福祉はすべての世代でつくるものという思いから、多世代を地域に巻き込むためのさまざまな仕掛けを取り入れたものでした。スポーツや七夕というキーワードは、子どもや子育て世代の関心を引くものですし、作品だけが参加する場合も多い作品展は、だれもができる範囲で地域に関わっていくための方法を考えるうえでのヒントを提供してくれます。また、スポーツ祭や七夕サロンに若年世代が積極的に参加することは、将来的な地域の担い手を発掘、育成することにも寄与すると考えられます。

居場所では、「自主性」がもっとも重視されています。参加はもちろんのこと、時間の過ごし方も、それぞれの自主性に委ねられている部分が少なくありません。ただし、年間行事表やポスター、回覧、チラシを作成、配布することや、参加者からのクチコミなど、自主的な参加を促すための積極的な情報提供を心がけています。

そして、東香里校区における取り組みの特徴として、「協働」が挙げられます。協働とは、共有された目標を達成するために、さまざまな立場の主体(個人、団体など)が、対等な関係で、役割を明確にしながら、それぞれのできることにできる範囲で取り組むことです。居場所も、校区コミュニティ協議会、老人会、民生委員、校区福祉委員会が協働しながら、それぞれの強みを生かしながら運営しています。スポーツ祭や七夕サロンは小学校の体育館を活用して実施していますが、これも学校の役割を明確にするとともに、日常的なコミュニケーションによるものです。

西長尾校区

西長尾元気づくり地域づくり

【地域の概要】

枚方市で一番新しい校区です。昭和40年代以降、工業団地として栄えた地域で、現在は、工業団地跡地を物流倉庫の拠点として活用されています。また、大阪・京都の通勤が1時間以内であり、ベッドタウンとして発達しています。

人口動態から、やや高齢化率の高い地域であることがわかります。

西長尾校区では、「元気」をテーマに、招提御殿郷公民館のほか、屋外を活用して、下記の活動に取り組んでいます。

【活動内容】

居場所で健康づくり

週2回、招提御殿郷公民館を、そして新型コロナウイルスの感染拡大以降は屋外を活用しながら、さまざまな健康づくりに取り組んでいます。「ひらかた元気くらわんか体操」はもちろんのこと、居場所づくりのリーダーとなる方々が各自で体操教室などに通って習得してきた体操を参加者の前で披露するのが特徴です。参加者のみなさんは、体操で汗を流したあと、雑談をしながらゆっくり過ごす時間を楽しみにしているようです。体操が終わり、一休みしたあとには、有志のみなさんがノルディック・ウォーキングで近隣地域の散歩や神社巡りをしています。

居場所における健康づくりは、ほかの活動にも展開しています。有志で「ゴルフの会」を立ち上げるメンバーや、枚方市が発祥とされるカーリンコンを楽しむ方々も多いようです。なお、「ゴルフの会」のメンバーは、子どもの見守り隊の活動に参加し、多くの子どもたちが参加するカーリンコン大会を「西長尾元気づくり地域づくり」主催で実施するなど、有志の活動であっても地域、とくに子どもたちとの関わりが強く意識されています。

元気づくり地域づくりの取り組みのなかで、地域のつながりも強まりました。買い物などでほかの参加者と出会ったときに、会話が弾むようになったことがとても嬉しいとおっしゃる参加者も多くおられます。

アンケート調査

活動時には参加者にアンケートを行っています。参加者の健康状態とともに、思いを知るためのたいせつなツールとなっています。自由記述欄には多くの方がお礼のことばを書いてくださるそうです。また、定期的に文章を書くことは参加者に

とってもよい機会のように、最初はひらがなが多く、単語をつなぐような文章を書かれていた方が、徐々にしっかりとした文章を書かれるようになったといった事例もあります。

いきいきサロンとの連携

地域で実施しているいきいきサロンも「元気」をキーワードにしながら、参加者が楽しめる場づくりに取り組んでいます。季節ごとに特徴あるイベントを実施したり、会場を花で飾りつけたり、参加者の誕生日会を開いてみんなで歌ったりと、体を動かさずに「元気」をつくる場になっています。いきいきサロンは、参加者が花を持ってきてくれるなど、みんなで楽しい場をつくっています。

元気づくり地域づくりといきいきサロン、ともに「元気」をテーマにしながら、異なるアプローチから活動に取り組んでおり、これにより、参加者は自身の健康状態や好みを踏まえて居場所を選択することができます。

防災活動との連携

これからの地域づくりのためには、健康、安心・安全のみならず、より広い視野をもったリーダーの育成が必要との思いから、近年では防災意識を高めるための活動にも取り組んでいます。防災施設の見学のほか、各種研修会への積極的な参加や、今後は他校区のボランティアとの意見交換の機会も設ける予定です。

【活動の特徴・工夫】

西長尾校区では、「元気」「健康づくり」をテーマにさまざまな活動に取り組んでいます。そのなかで重視されているのは「みんなが役割をもつこと」です。

「ひらかた元気くらわんか体操」だけでなく運営者それぞれが得意な体操を取り入れたり、有志の活動と地域づくりを連動させたり、参加者と一緒に楽しい場づくりに取り組んだり、とみんなが役割を持てるような工夫がいっぱいです。

インタビューのなかで聴かせていただいたつぎのことばは、西長尾校区での取り組みへの想いを端的に表したものだと思います。

(参加者と運営者関係なく)キャッチボールができていけばね。その人も生きがいになってくる。それで、参加して、自分も協力してるって意識が生まれてくるから、それがやっぱり脳の活性化であったり、気力の充実につながっていく。それがサロンや元気づくりの目的ですからね。

(文意を変えずに一部修正しています)

【参考】枚方市内における居場所のようす

本章で取り上げた居場所を運営されるみなさまから、とくに新型コロナウイルス感染拡大以降の活動(一部、感染拡大前の写真もあります)の様子を撮影した写真を提供していただきました。これらの写真から、活動の雰囲気を理解するとともに、ご自身の地域における活動をイメージしていただければと思います。





3. これからの居場所づくりに向けて

ここまで、8つの校区における居場所づくり、地域づくりの取り組みについて、その特徴や工夫とともに示してきました。ここからは、今回のインタビュー調査を通じて明らかになった、これからの居場所づくりのヒントを、キーワードごとに紹介していきたいと思います。

1) テーマを明確にする

居場所づくりに取り組むうえでもっとも重要なのは、テーマを明確にすることです。居場所づくりに関して目指すべきは、「だれもが訪れやすい場をつくること」にほかなりませんが、ここでいうテーマとは、居場所をつくることを通じてなにを達成したいかを意味します。ミッション(使命)やビジョン(目指すべき姿)と言い換えてもよいかもしれません。

今回のインタビュー調査でも、「健康づくり」「一体感」「世代間交流」「地域とのつながり」など、それぞれの校区では、それぞれのテーマをもって活動されていることがわかりました。居場所づくりを最終目標とするのではなく、居場所づくりを通じてなにを達成したいか、どんな地域にしていきたいかを明確にすること、これが、よい居場所づくりのための第一歩となります。そして今回取り上げた校区を含め、多くの場合、居場所づくりは、たくさんの仲間とともに取り組むものですから、テーマ、ミッション、ビジョンを、地域の仲間たちとしっかり共有しておくことも、よい居場所づくり、そしてよい地域づくりのためにたいせつなステップです。

居場所づくりにこれから取り組む方はもちろんのこと、すでに取り組んでおられる方もぜひ、一度自分たちの活動をふりかえりながら、居場所づくりを通じてどんな地域にしていきたいか、みなさんと話し合ってみませんか？

2) こだわりをもつ

居場所は、地域ごと、そして参加者を含めた居場所の運営に関わる人びとによって活動内容も大きく変わります。そんななかで重要になるのは、「こだわり」です。こだわりは、居場所の個性ともいえるもので、運営者、参加者の活動に対するモチベーションにもつながります。

今回のインタビューでも、「コーヒーへのこだわり」「作品(居場所での手芸などでつくるもの)へのこだわり」など、「せっかく取り組むんだったらとことんこだわりたい！」という運営者の想いを知ることができました。そしてこのこだわりは、けっして運営者が楽しむためだけのものではなく、こだわりの一杯を楽しんだり、こだわって作った質の高い作品を持ち帰って自宅に飾ったり、参加者が居場所を楽しみ、場合によっては自宅でも地域とのつながりを感じるツールともなりえるのです。

みなさんの居場所では、なににこだわりますか？

3) 垣根をこえる

さて、ここまで運営者、参加者という表現を使ってきましたが、じつは、このような立場のちがいを取り払ってしまうこともよい居場所づくりに取り組むうえでのポイントです。現在、社会全体として目指されている地域共生社会とは、「支え手側(支える側)と受け手側(支えられる側)」に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活

躍できる地域コミュニティ」とのことでしたが(詳しくは「1. みんなの居場所を地域につくる」をお読みください)、立場のちがひ、垣根をこえるという発想は、まさに地域共生社会の実現に向けて欠かせない視点のひとつなのです。より具体的にいえば、先の引用文に示すとおり、「役割をもつ」「支え合う」「活躍する」ことが、運営者と参加者の垣根をこえるためのキーワードとなります。

今回のインタビューでも、参加者であっても「自分でお茶の準備をする」「お菓子をつくって差し入れする」「得意な出し物を披露する」「講師役を務める」など、居場所のなかで役割を見つけ、活躍している事例を数多く聴かせていただきました。これからの居場所づくりのあり方を考えたとき、参加者であっても「お客様」として時間を過ごすのではなく、それぞれが、自分にできることを考え、役割を見つけ、活躍するような場所がよい居場所なのだと思います。もちろん、無理をする必要はありません。「できることを、できる範囲で」が持続可能な地域づくりの基本的な考え方です。また、いくつかの地域では、大学生をはじめとする地域外の人たちが居場所づくりに参加し、活躍していました。「担い手不足」が地域の課題となるなか、居場所づくり、地域づくりは、地域の人たちだけで取り組まなければならないものではありません。地域の外で活動する人たちの力とは、地域に刺激、活力を与えるきっかけになるかもしれません。

運営者、参加者という垣根を、そして、場合によっては地域内、地域外という垣根をこえて、「みんなでつくる居場所」を目指してみませんか？

4)「得意」を把握する

「みんなでつくる居場所」のなかで、みんなが役割をもち、活躍するためには、みんなが「得意」を発揮する必要があります。ここでいう「得意」とは、個々人の趣味や特技、資格や仕事に関するスキルに加え、「聴き上手」「伝え上手」「まとめ上手」などの特性を含むものです。みんなが得意を発揮するためには、居場所のなかで、「こんなことができるよ」「こんなことが得意だよ」とみずから立候補してくださればよいのですが、それには勇気が必要です。そんなときに必要になるのが、「得意」を把握するという視点です。居場所に関わる人たち(もちろん運営者だけでなく参加者も)の特技や資格、スキル、特性をしっかりと把握しておくことによって、みんなが「得意」を発揮できる場ができあがるはずですが、みんなの「得意」を把握するためには、アンケートなどを作成して全体に聴き取りを行うことも有効ですが、居場所でのふだんの会話や行動のなかには、もしかするとご本人も気づいていないような「得意」(とくに特性など)が隠れているかもしれません。だからこそ、みんなの「得意」を把握するという視点をもっておくことがたいせつなのです。

なお、「得意」を把握することが有効となるのは、居場所のなかだけではありません。井戸端会議のなかで、会合のなかで、地域のイベントのなかで…、などなど、地域全体を見渡してみると、いろんな「得意」をもった人が出会えるはずですが、こういった人たちは、居場所づくりはもちろんのこと、「地域のなかにある生きづらさを解消する」、そんな地域づくり(地域福祉)の担い手として、きっと活躍してくれるはずですが。

今回のインタビューでも、居場所はもちろんのこと、「困ったことがあったら、地域のなかにいる資格や仕事上のスキルをもった人に相談する」「会合やイベントは人材発掘のたいせつな機

会」などといった意見も聞かれました。地域を人材の宝庫であり、さまざまな場面で、その特技や資格、スキル、特性を含め、「得意」を発揮してくれる担い手と出会えるはずです。

みなさんの地域には、どんな「得意」がありますか？

5) 選択肢を提示する

よい居場所とは、みんなが自主的に訪れたいくなるような場ではないでしょうか。つまり、無理に誘って参加してもらうのではなく、「行きたいな」「行ってみたいな」と思える場をつくるのが大切です。今回のインタビューでも、「自主性」というキーワードが頻繁に聴かれ、「来たいと思う人が参加するのが基本」という考え方が、ひとつの共通認識となっていました。そして、今回取り上げた校区では、このような考え方に基づき、多くの人が訪れたいくなるような居場所づくりに取り組まれていました。

「自主性」を尊重するためにたいせつになるのが、「適切な情報発信」です。つまり、居場所に参加するかどうかについて、最終的な判断をするのは各個人で、居場所の運営者としては、みんなが訪れたいくなるような魅力的な場づくりに取り組むことになるわけですが、居場所がせっかく魅力的なものになったとしても、その場所が知られていなければ、参加のしようがありません。だからこそ、積極的な広報活動に取り組むことが必要となります。複数の校区において実施されているように、広報紙(ニュース、通信、たより、など)を発行することも有効ですし、最近ではSNSを利用している方も増えてきています。そしてなにより、地域においてはクチコミが非常に大きな役割を果たしています。「みんなが訪れたいくなるような居場所」に加えて、「みんなに選んでもらえる居場所」という視点を持ち、どうすれば地域のより広い層に情報を発信できるかを考えることがたいせつです。そして可能であれば、自分たちがつくる居場所のほかにも、趣味の集まりやボランティアグループなど、地域のなかにあるさまざまな選択肢を提示することにも取り組んでいただきたいと思います。価値観、境遇が多様化する社会のなかで、「ただひとつの正解」を見つけることは容易ではありません。だからこそ、地域のあるべき姿について考えたとき、一人ひとりがしっかりと判断するための選択肢を提示することが、とてもたいせつな取り組みになるのではないのでしょうか。

みなさんの居場所の魅力や、そして地域にあるさまざまな選択肢を、適切に提示するための情報発信の方法について、考えてみませんか？

6) 地域内外につながりをつくる

今回取り上げた校区でも、個人もしくはひとつの団体のみで居場所を運営しているという事例はなく、校区コミュニティ協議会、民生委員、学校、企業などと連携しながら活動に取り組んでいました。大学生など、地域外の主体とも連携している場合も少なくありません。このような地域内外のつながりについては、「1. みんなの居場所を地域につくる」でも紹介した協働、とくに「必要性に基づく協働」「戦略的な協働」の視点が重要になります。つまり、「地域に関わる主体をとにかく地域づくりに巻き込もう！」という発想ではなく、「この取り組みを進めるためには、だれに、どんな役割を担ってもらおうか」を明確することは、効果的な協働はもちろんのこと、持続可能な地域づくりにも寄与するものです。そして、必要性に基づく、戦略的な協働をデザイ

ンするためには、地域の内外にある「得意」を把握することが必要になることもたいせつなポイントです。

「必要性に基づく協働」という視点を持ち、「戦略的な協働」をデザインしていく。居場所づくりを通じてよい地域を目指そうとすると、みなさんは、だれとともに、どんなことに取り組みますか？その取り組みは、持続可能なものですか？

7)子どもを大切にす

今回のインタビューは、「枚方市高齢者居場所づくり事業」のなかで、居場所づくり、地域づくりに取り組まれている運営者のみなさんに実施したものですので、それぞれの校区では、基本的には高齢者を意識した活動が展開されていました。一方で、多くの校区において、とくに地域づくりに取り組むにあたり、「子ども」「世代間交流」が重要なキーワードとなっていました。

いうまでもなく、子どもは「地域の宝」であり、地域全体で大切に育てていかなければなりません。子どもは、人格をもったひとりの人間であり、その意思を十分に尊重しなければなりません。一方で、子どもとは、おとなへの成長過程にある存在であり、身体的、精神的に未熟な側面もあります。このことから、私たちは、「守るべき存在」「次代を担う育てるべき存在」のふたつの視点をもって、子どもたちと関わる必要があります。「子どもの意見を尊重すること」「子どもたちに複数の選択肢を提示すること」「子どもが不安そうなときに声をかけること」「子どもが困ったときにすぐに相談できる場をつくること」「子どもが誤った言動をしたときに諭すこと」「子どもたちが主役として地域(社会)と関わる機会をつくること」などが、子どもを地域で育てるための具体的な方法です。とはいえ、顔見知りの関係でもないかぎり、子どもたちに声をかけることや子どもたちを諭すことは容易ではありません。だからこそ、子どもたちを含め、「顔見知りの関係」を地域のなかにたくさんつくることがたいせつになります。あいさつや日常的な声かけはもちろんのこと、子ども食堂や世代をこえて交流できるようなイベントなども、「顔見知りの関係」をつくるためには有効です。さまざまな機会を通じて地域との関わりを経験した子どもたちは、きっとおとなになっても地域と関わりつづけ、そして次の世代を育てる役割を担ってくれるはずですよ。

なお、子どもを大切に、地域と関わる機会を積極的につくることは、子どもにとっての親世代、つまり働いている層の地域への参加を促すことにもつながります。「子どもが楽しめる場所だったら参加したい」「子どものためになる機会なら協力したい」と考えている保護者は少なくありません。

地域のなかにたくさんの「顔見知りの関係」をつくり、子どもたちを守り、育てていくために、みなさんの居場所ですることはありますか？

8)真剣に楽しく取り組む

繰り返しになりますが、「みんなが自主的に訪れたいくなること」は、よい居場所の条件のひとつです。みなさんが訪れたいと思う場所はどんな場所でしょうか。「人に出会える」「役立つ情報が得られる」「おいしいものが食べられる」「適度に体を動かせる」「趣味に没頭できる」など、人それぞれポイントは異なりますが、「楽しい場所で時間を過ごしたい！」は、みんなの思いでは

ないでしょうか。「楽しい場所」をつくるための方法は、ここまでご紹介してきた「得意」「地域内外のつながり」「子ども」などのキーワードも参考に、それぞれの居場所で試行錯誤しながら取り組んでいただければと思います。やはり、参加者に楽しんでもらう場所をつくるためには、運営に関わる人たちが心から楽しむことが一番！なのではないかと考えています。インタビューでも「満足度」ということばを聴かせていただきましたが、運営に関わる人たちの満足度は、居場所の持続可能性(長続きする要因)につながり、長続きする居場所は参加者の安心感と場の認知度向上につながり、居場所での安心感(居心地のよさ)は参加者の満足度を高め…、というように、まずは運営に関わる人たちが楽しむことで参加者も楽しみ、居場所そのものが楽しい場になると考えられます。同時に、「テーマ」「こだわり」など、真剣になって取り組めることも、やりがいを通じて「満足度」を高めることにつながります。真剣に楽しく、これが居場所づくりの基本！といっても過言ではありません。

みなさんも真剣に楽しく、みんなの満足度を高める居場所づくりに取り組みましょう！！！！

ここまで、インタビューから得られた居場所づくりのヒントを紹介してきました。これらはあくまでヒントですので、すべてをそのまま実践していただく必要はありませんが、「この視点をうちにも取り入れてみよう」「これはうちでも意識しているから今後も続けてみよう」「逆にこういう発想でやってみよう」など、みなさんが居場所についてあらためて考え、そしてつぎの一步を踏み出すためのきっかけになれば幸いです。

おわりに

今回、地域づくりを意識しながら居場所づくりに取り組まれるみなさまに対するインタビュー調査を行い、その内容を整理するとともに、これからの枚方市における効果的な居場所づくりのあり方を検討してきました。貴重なお話を聴かせていただいた8つの校区における取り組みは、それぞれ個性的で、かつ居場所づくり、地域づくりのヒントが詰まったもので、私の拙い文章力でその魅力をすべてお伝えすることができたか不安もございましたが、活動の内容と特徴・工夫についてはしっかりと整理できたのではないかと思います。また、8つの校区における実践事例および基本的な考え方(「1. みんなの居場所を地域につくる」)を踏まえて考察を行った「3. これからの居場所づくりに向けて」では、これからの居場所づくりについて「テーマを明確にする」「こだわりをもつ」「垣根をこえる」「『得意』を把握する」「選択肢を提示する」「地域内外につながりをつくる」「子どもを大切に作る」「真剣に楽しく取り組む」という8つのキーワードを抽出することができました。繰り返しになりますが、本調査において得られた知見はあくまで居場所づくり、地域づくりのヒントです。本報告書を手を、地域のみなさんでこれからの居場所づくり、地域づくりについて、わいわい楽しく対話していただき、なにかひとつでも、あたらしい実践へとつながればと思うところです。

本報告書を作成するにあたり、数多くの方々にご協力をいただきました。

まず、インタビュー調査にご協力いただいたみなさまに心より御礼を申し上げます。新型コロナウイルス感染拡大の影響がまだまだ大きな時期に、長時間にわたり貴重なお話を聴かせていただき、まことにありがとうございました。また、今回の調査は、インタビュー調査でお話を聴かせていただいた方々はもちろんのこと、8つの校区で日々、居場所づくりに取り組むみなさまの活動なしには実現しませんでした。日々のご尽力に心よりの敬意を表するとともに、今後ますますの活動の発展を祈念申し上げます。

また、インタビュー調査の実施にあたり、枚方市健康福祉部健康寿命推進室をはじめとするみなさまには、調査の構想段階から実施に至るまで、長期間にわたり、また調査にかかる手続きの全般において、ご協力いただきました。みなさまのご高配に心よりの御礼を申し上げます。

※本研究は JSPS 科研費 JP19K13961 の助成を受けたものです。

奥付

